

平成 17 年度都田小学校校内研修（案）

研修主題

『自らが伝えたいことを伝えようと日々努力する児童の育成』

副主題

- 聞き手が納得する伝えができた喜びを経験することを通して -

主題設定の理由

（１）今日的な課題から（学習指導要領等）

新学習指導要領では，子どもたちに基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び自ら考える力などの「生きる力」をはぐくむことをねらいとしている。

文部科学省では，『高度情報通信ネットワーク社会が進展していく中で、子どもたちが、コンピュータやインターネットを活用し、情報社会に主体的に対応できる「情報活用能力」を育成することは非常に重要です。こうした情報活用能力の一層の充実を図るために、新しい教育課程では、

- 1．小・中・高と各学校段階を通じて、各教科等や「総合的な学習の時間」においてコンピュータやインターネットの積極的な活用を図るとともに、
- 2．中・高等学校において、情報に関する教科・内容を必修としています。

また、各教科等の授業の中で、先生がプレゼンテーションしたり、子どもたちがコンピュータやインターネットで調べたり、交流したりすることによって、「わかる授業」や「魅力ある授業」の実現に役立てていきます。』としている。

学習指導要領の第 1 章総則では、

(8)各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、適切に活用する学習活動を充実するとともに、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。とされている。

国語科では、

第 1 目標：国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

社会科では、

(4)学校図書館や公共図書館、コンピュータなどを活用して、資料の収集・活用・整理などを行うようにすること。また、第 4 学年以降においては、教科用図書の地図を活用すること。

算数科では、

(6)コンピュータなどを有効に活用し、数量や図形についての感覚を豊かにしたり、表やグラフを用いて表現する力を高めたりするよう留意すること。

理科では、

(1)観察、実験、栽培、飼育及びものづくりの指導については、指導内容に応じてコンピュータ、視聴覚機器など適切な機器を選ぶとともに、その扱いに慣れ、それらを活用できるようにすること。また、事故の防止に十分留意すること。

生活科では、

(2)自分と地域の人々、社会及び自然とのかかわりが具体的に把握できるような学習活動を行うこととし、校外での活動を積極的に取り入れること。なお、必要に応じて手紙や電話などをを用い伝え合う活動

についても工夫すること。

また、変化の激しいこれからの社会を生きる子供たちには、[生きる力]、[確かな学力]を育むことが必要としている。

[生きる力]とは、変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい[確かな学力]、[豊かな人間性]、「健康と体力」の3つの要素からなる力

[確かな学力]とは、知識や技能はもちろんのこと、これに加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力等まで含めたものと定義されている。

各学校において、自ら学び自ら考える力にとって不可欠な基礎・基本の徹底がおろそかになっているのではないかとの各方面からの指摘がある。

自ら学び自ら考えることができる「生きる力」を養うためには、その裏づけとなる「確かな学力」の育成が大切である。

「確かな学力」を身につけるための根幹を成す力が、学ぶ意欲であり、その意欲に基づいて、自ら課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、より良く問題解決する資質や能力を養われる。

学ぶ意欲は、学校生活のあらゆる場面で、自らの学習やその成果が認められることによる喜びの積み重ねによって高められる。

本校では、子供たちの「伝える」学習活動に視点を絞り、自ら学び、調べ、理解したことを相手に納得してもらえるように伝えるにはどうしたらよいのかを、全教職員で研究・実践を進めていくこととした。

(2) 学校教育目標・学校経営方針から

本校では、「心豊かで生き生きと活動する子」を学校教育目標としている。

「心豊かで生き生きと活動する子」とは、生命を尊重する心や他人を思いやる心、感動する心などの豊かな人間性を持ち、夢や希望、目標に向かって主体的に活動する子と想定している。

具体的な目標を持ち、粘り強く最後まで取り組み、目標を達成することを繰り返し経験することによって、自らに自信を持ち、自らの行動に責任を持ち、新たな目標に挑戦していこうとする勇気と希望を持つことができるとしている。

満足感・成就感・達成感を味わうためには、自らの努力が認められることが必要である。

そのためには、自らの取り組んだ内容や、学習内容・思い・考えが相手が納得できるように伝えることができなければならないと考える。

納得してもらえるようにするためには、課題を明確にし、十分に調べ、相手に伝わるように整理しまとめる力が必要である。

よって、伝える場面に焦点を当て、実践研究を進めることによって、日々努力する子が育成できると考える。

(3) 児童の実態・教師の願いから

本校は、各学年単級であり、幼年期より変わらぬ人間関係の中で自己表現を繰り返してきている。

そのため、児童間では、十分な表現を行わなくても、意思疎通ができる関係に浸っている面があり、校外学習や宿泊訓練等、外部と接して表現活動を行わなくてはならない場面になると、十分に伝えられない面が見られる。

子供たちが将来、この地域のみならず多くの人や地域と接点を持ち生活していくことを考えると、他地域との積極的な交流を図るなど、伝える場面の設定の仕方も含め研究していく必要がある。

教師集団も、説明責任・結果責任を明確にするためにも、学習指導要領等、公教育の施策や方針と照

らし合わせた外部評価を受け、子供たちの将来を見据えた教育を行っていく必要があるとともに、教師自身の資質の向上に努めなければならない。

校内研修のみならず、外部からの定期的な指導を受け、自らの資質の向上のためにも研究会を経験してみたい、という願いを持っている教師もいる。

(4) これまでの実践の成果・課題から

本校では、学校インターネット3の指定を受け、「分かる・できる授業の実現」を目指し、平成14年度より効果的・効率的なIT活用のあり方を中心に研究を進めてきた。

平成14年度には、教育の情報化の意味を知り本校の課題を明確にするために学識経験者の指導を定期的に受け、子供たちがいつでもどこでもITを活用し学習できる環境整備と、調べ・まとめ・伝えるという学習過程、つまり学び方の定着に中心を置き研究を進めた。

平成15年度には、「分かる・できる授業の実現」のために、教師が使うIT・子供が使うITに視点をあて、各教科の内容を十分に理解させ、分かった・できたと言う喜びをいかに与えるか、そのためにどうITを活用したらよいのかを、定期的に外部講師の指導を受けながら研究を進めた。

平成15年度末には、指導講師より、これまでの実践研究を整理しまとめ、系統的に子供たちに身につけさせたい力として表す必要性と、ITを活用することによって、その先にある、これからの社会に生きていくために必要な力を養うことに焦点を当てた実践研究の必要性が課題として提示された。

ここまでの実践研究は、学習指導要領の総則や各教科の内容に見られるコンピュータや情報ネットワークの活用に関する項目も参考に進められた。

平成16年度は、これまでの研究を踏まえ、半数が入れ替わった職員体制のもと、今一度「分かる・できる授業の実現」に向けて、特に、「見つけ」に視点をあてて研究を進めてきた。

しかし、教師間のメディアとのかかわり方に格差が見られたため、教師も子供たちも、ITを使うことに目が向き、機器操作・ソフト操作が目的となっている場面が多く見られた。

機器操作・ソフト操作が中心になったことによって、昼休みや放課後等のパソコン室利用が14年度以前の状態に戻りつつあり、ネットゲームなどに夢中になっている姿が見られるようになって来た。

これは、情報化社会を生きていかなければならない子供たちにとって、表面的な操作指導から陥りやすい重大な問題であり、メディアとの付き合い方をしっかりと指導しなければいけない状態になっていると考える。

メディアを使いこなす、メディアをどう使うのかを学び、その向こう側にある人を意識した指導が必要だと考える。

そのためにも、伝える学習に焦点を当て研修を進めることは大切である。

研修のねらい

自らが伝えたいことを伝えようと日々努力する児童にするためには、聞き手が納得するまで調べ、伝わりやすく整理しまとめ伝えることができ、伝わった喜びを繰返し経験することが有効であることを明らかにする。

研修の見通し

伝える場面では、自己評価・相互評価を取り入れることによって、聞き手が納得できる調べや整理ができたかどうかを確かめることができる。

聞き手が納得できる調べや整理・表現の仕方の段階で、効果的な整理の仕方や表現の仕方、情報ネットワークを利用した調べ方の指導を工夫することによって、子供たちは、学習に対する成就感を持ち、

伝わった喜びを大きく味わうことができると考える。

各学級には、ポートフォリオボックスを用意し、伝えるために何を行ったかをいつでも振り返ることができる環境を用意することによって、日々の努力を自ら確認できる。

単元毎、学期毎に、子供たち個々のポートフォリオボックスを評価することによって、子供たちの意欲は高まり、より一層日々努力するようになると思う。

多様な表現方法や学習方法・場面を経験することによって、子供たち自らが選択できる幅を広くし、伝えるために効果的な学習を促すことができる。

教師自身が、多様になった学習方法や表現方法・場面を正しく経験することによって、子供たちに良い事例を示すことができ、子供たちは自信を持って活動できるようになると考える。

基本的な考え方

自らが伝えたいことを伝えようと日々努力する児童とは、

- 自分が伝えたいことを、相手が納得できるように調べ、まとめ、表現できる子
- 十分に伝わらない時には、さらに調べ納得してもらえるように継続して学習できる子
- 聞き手からの質問や意見にも耳を傾け、自分の考えや思いで修正しなくてはいけないことは素直に修正できる子
- 伝える力の中で、自らに足りない部分を自覚し努力できる子

と考える。

聞き手が納得する伝えができた喜びを経験することの意義は、

- 自らの学習やその成果を、聞き手が納得できるように伝えられた喜びを経験するということは、学ぶ意欲の向上につながる。
- 喜びを経験するために、伝える力を育成することは、調べ・まとめる力の育成につながる。
- 伝えるためには、話す力・書く力・聞く力とともに、メディアの特性と適切なメディアの選択の仕方を学んでいくことが大切である。
- メディアの特性と適切なメディアの選択の仕方を学んで行くことにより、メディアが生活に与える影響や、メディアが取り巻く社会での安全な行動の仕方を経験的に学んでいくことにつながる。

これらの力を養う場面を設定し、指導していくことは、これからの社会を生き抜く力を育成する上で重要なことである。

研修の内容

自分が伝えたいことを伝えようと日々努力する児童を育成するために、以下の内容に取り組む場の設定

- 各教室にポートフォリオボックスを設置し、伝えるために取り組んだことを蓄積・振り返りができる場を用意する。
- 授業・集会等の中で、伝えることができたかを自己評価・相互評価する場を設定する。
- 自らが伝えたいことを伝えるために、いつでもどこからでもメディアを利用して学習できる環境を用意する。

教員研修（授業研究・学習方法の経験値向上）

- 授業研究（伝えるに焦点）を中心に研修を進める。
- 伝えたいことを効果的に伝えるために、メディアの特性を生かし、適切なメディアを選択することができるように手立てを打つことができたかを検証する。
- 聞き手が納得できる内容にするために、様々なメディアの特性を生かし、効果的に調べ・整理

しまとめることができるように手立てを打つことができたかを検証する。

- 参観者は授業評価指標をもとに授業を評価し、聞き手が納得する伝えを行うための手立てが有効であったか検証する。
- ワークショップ・ポスターセッション等、多様な学習形態を取り入れた職員研修を行い、職員の経験値を向上させる。

伝える力の系統表の作成

- 伝えるために必要な力を洗い出し、系統表を作成する。

研修の方法

研修組織	研究推進委員会	校内研修全体の企画運営 指導案の事前検討指導 系統表原案の作成・提案 授業評価指標原案の作成・提案
	全体会	全体協議・授業事後研修等を行う
	分科会	伝える自己評価・相互評価部会 伝えるための学習部会
研修計画	2月	系統表原案提案検討・授業評価指標原案提案検討
	3月	系統表完成・評価指標完成
	4月	新年度体制で研推 研修主題・内容等 17年度都田小校内研修提案・了承 全体会 平成 17年度校内研修案提案・協議・了承 分科会 作業計画立案 研推 提案授業指導案検討
	5月	提案授業（研修主任）『伝えるための学習場面』 提案授業（研修主任）『伝える場面』 研推（指導案検討） 研究授業
	6月	以下略

検証計画

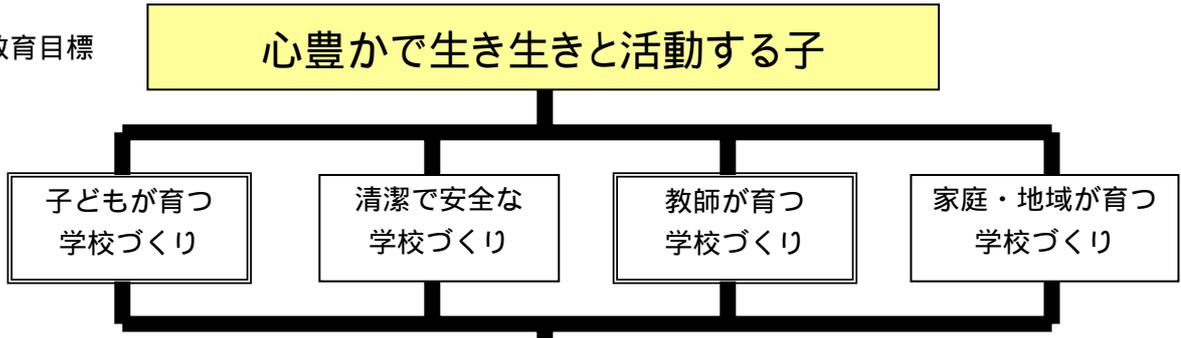
検証の観点・検証の場面・検証の方法

全体構想図

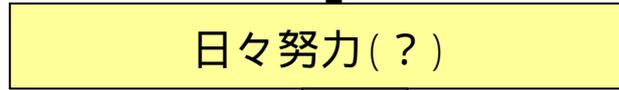
上述のものを基に、基本構想を別途図示する。

全体構想図

学校教育目標

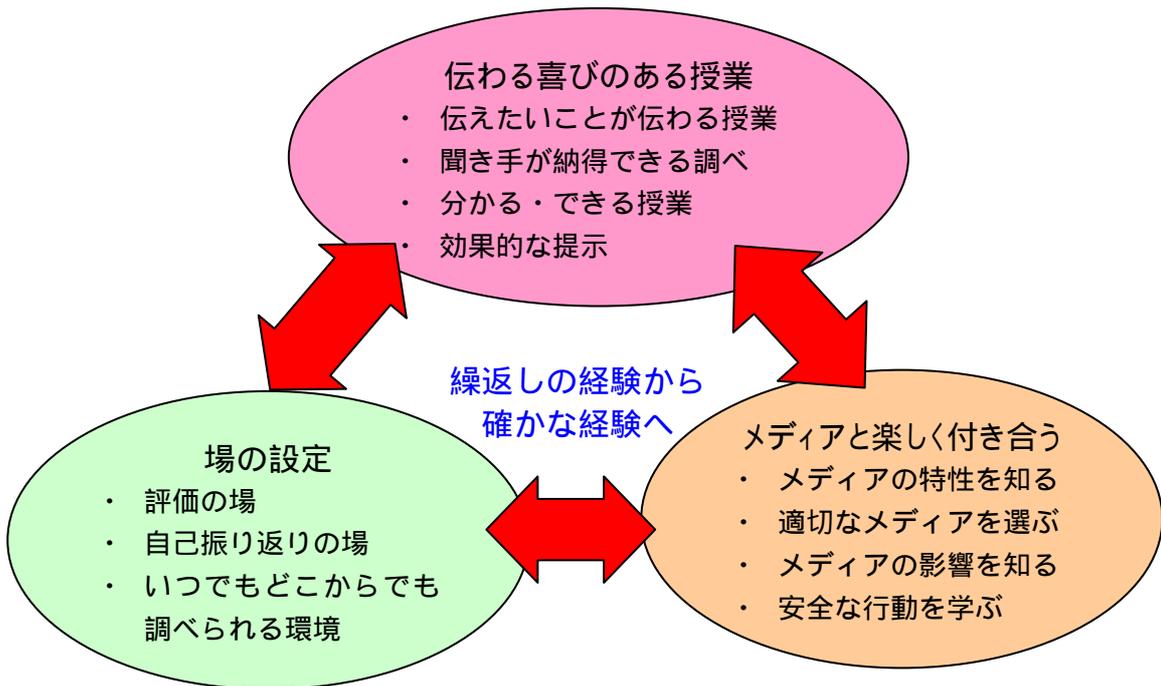


目指す子供像



研修主題 **「自らが伝えたいことを伝えようと日々努力する児童の育成」**

聞き手が納得する伝えができた喜びを経験することを通して



生活の基礎基本・学習の基礎基本・系統的な学力の育成

学校・家庭・地域の連携